

平成 28 年 9 月 30 日（金）

国見町食育推進検討委員会 第 1 回生産と消費、食文化検討部会

福島大学 岩崎由美子 委員

6 次産業化と人づくりに係る先進事例について

ここでは、どういう視点から国見町での 6 次化の推進を考えていくべきか、事例を踏まえながら話をさせていただきたいと思います。

6 次化を推進する上でとても大切なのは、「誰がやるのか」という主体づくりのところだと思います。いくら素晴らしい計画ができあがっても、ではそれを誰がやっていくのか、というその担い手の具体的な姿が見えてこない、町が先頭に立って行政主導でやり続けていくという構図がいつまでも変わらないのではないかという問題意識を持っております。

6 次化で活躍する人をどう育てていくかという「人づくり」の視点も今回の 6 次化計画の中に盛り込んでいくべきだと思うので、その参考になるような事例を 2 つ紹介したいと思います。一つは、先ほどの 6 次化推進事業と関わってご紹介のあった山形県川西町、もう一つは福島県西会津町の取り組みです。2 つの事例はおかれた地域条件も違いますので、そのままマネすることはできませんが、国見流の仕組みづくりを検討するうえで何か参考になるところはないだろうか、というスタンスで聞いていただければと思います。

まず先に川西町のご紹介をします。川西町は、地域づくりの人材育成に以前から力を入れておりますが、その基盤となっているのが、小学校区単位で立ち上げている地域マネジメント組織です。農村集落の高齢化が進行する中では、例えば特産品開発や 6 次化、交流事業、移住者の受け入れ等、「攻めのまちづくり」を集落単位で行うことが非常に難しくなっています。また、集落、自治会というのは、構成単位が「世帯」で、集落の役員も世帯単位で回していきますので、地域活動に出てくるのはだいたい年輩の男性達が中心になります。集落の共同作業等、地域で従来からやってきた仕事を手抜かりなく進めていく、いわゆる「守り」の取り組みに関しては、集落は結集力を発揮しますが、新たに「攻め」の事業展開を単独の集落で進めていくのはとても難しい面があります。

川西町では小学校区単位で協議会を立ち上げたのですが、その協議会の構成単位は世帯ではなく、個人です。小学校区の中で地域づくりに興味がありそうな人、面白いアイデアを持っていそうな人、あるいは会社勤めの経験があつて会計面で能力のある人など、そういう人たちが個人単位で参画できる協議会を立ち上げていく。島根県中山間地域センターの藤山浩先生は、このような地域

協議会は「卵パック」の役割を果たすとおっしゃっています。一つ一つの集落が卵だとすると、高齢化が進み、人口も減ってしまって、ちょっと気を抜くと割れてしまいかねない。だけど、その卵を柔らかく包み込む卵パックがあれば、卵は何とか割れずに済む。地域運営組織とはその卵パックの役割を果たすのだということです。また、こういった中間組織は、行政と集落を繋ぐハブ機能の役割を果たします。集落の力が弱まってくると、どうしても行政主導になりがちなところを、行政と集落の間を繋ぐ協議会を立ち上げることで新たな活動や人材育成を内発的に図ることができます。

川西町では、小学校区ごとに今後の地区の将来ビジョンを話し合っただけで策定した地区別計画が協議会の活動の土台となっています。なかでも有名な事例の一つは、「きらりよしじまネットワーク」という吉島地区全世帯が加入するNPO法人です。「きらりよしじま」は、指定管理料のみならず積極的に委託事業や補助金をとって運営しているのですが、特徴的なのが若手の人材育成に力を入れている点です。若者の参加によるワークショップを運営したり、養成講座を受講したりなど研修の機会を提供することで、若手住民の間に横のネットワークを作り、将来の地域リーダーが育っていく仕組みづくりに積極的です。また、地域女性の起業支援や、I、U、Jターンの受け皿になる仕組みづくりなどにも取り組んでいます。

もう一つは、東沢地区を母体とした「東沢地区協働のまちづくり推進会議」です。地域活性化の取り組みのきっかけになったのは、東京都町田市の子もたちを地区で受け入れる「やんちゃ留学」だったそうです。町田市住民との交流が生まれていく中で、農業振興の仕掛けづくりにも取り組み始めます。

地区の中には農業振興の組織が3つあり、一つは、水稲・大豆・枝豆・そばなどの経営と作業受託をしている「農事組合法人 夢里」、もう一つは女性の加工グループの「東沢夢工房」、もう一つが「東沢米翔」という、認定農業者と法人が出資して作った会社で、「おむすび権米衛」と契約をして首都圏の店舗で東沢地区のお米でつくったおむすびを販売しています。この3つの法人を合わせて年間1億円の売り上げをあげるなど、農家の所得向上に力を入れています。

以上のように、川西町では、地区ごとの協議会を立ち上げて、徹底的な話し合いをして計画をつくり、その過程の中で次世代の人材を育てていくという取り組みをしているのが特徴的です。こういった「人づくり」を基盤にしているからこそ6次化計画もうまく回っているのではないかと思います。

次に紹介する事例は、福島県西会津町です。町内には「よりっせ」という道の駅がありまして、2016年8月には店舗が増築されました。新潟との県境にあり、国見町と比べるととても不便な中山間地域ですが、地域活性化の取り組みは実に活発です。その一つが「健康ミネラル野菜」による農業振興で、2016年に

農政局主催の「豊かなむらづくり」の表彰を受けています。西会津町ではかつて、会津地方特有の塩分の高い食事を摂りがちということで、平均寿命が短い「短命の町」だと言われていたそうです。その汚名を晴らしたいということで、前町長が「100歳への挑戦」という町づくりを始めます。人の健康づくりとともに、土の健康づくりにも挑戦しようということで土壌診断をして良い土づくりをし、また農家の財布の健康もつくっていかうということで、ミネラル栽培による付加価値づくりを行っています。

平成16年に道の駅「よりっせ」ができるのですが、道の駅を運営する「人」を作っていかななくてはならないということで、住民を対象に様々な研修会を開きます。店舗のレストランの運営主体を育てるために町民に働きかけたところ、女性を中心に25人ほど集まり、そこで講師を招いて勉強会を開きました。その受講生の中から2つのグループが生まれました。一つはレストラン「櫟」という、道の駅内にあるレストランを運営しているグループ、もう一つはNPO法人ローカルフレンズという、都会に住んでいる方に年4回いろいろな産物を届ける取り組みをしているグループです。

さらにNPO法人ローカルフレンズを母体として新しい加工グループが生まれたり、農家レストランや農家民宿を運営する女性が出てきたりと、NPOがインキュベーター（孵卵器）の役割を果たしています。

町では、農産物加工やグリーン・ツーリズムに力を入れていて、地域おこし協力隊として加工の専門家を招き、農家民宿も増加傾向にあります。これらの取り組みと並行して移住者数も増えつつあり、その情報発信拠点として「西会津町国際芸術村」が整備されています。

以上、6次化の推進にあたっては、施設整備のみならず「人づくり」にも同時並行的に取り組んでいく必要があるという視点から、事例紹介をさせていただきました。

以上